

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	奥風 栄弘（兵庫県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第104号
学位授与の日付	平成31年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第3項
学位論文題目	『梵学津梁』の調査と研究
論文審査委員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 小野田俊蔵（佛教大学教授） 副査 乾 龍仁（高野山大学教授）

〔1〕論文の概要

奥風栄弘氏の学位請求論文は、江戸中期に河内国の高貴寺住職を務めた慈雲尊者（1718-1805）によって編纂された『梵学津梁』に対する調査と研究である。インドから中国を経て伝えられた梵字資料（梵文資料）が我が国には多数保存されているが、『般若心経』『金剛般若経』『阿弥陀経』の梵文写本は複写されて明治初期に海を渡り、英国のマックス・ミュラーによる校訂テキスト出版の底本になった。この中で、梵文『阿弥陀経』の完本は我が国にしか残されていない。我が国の梵学（梵語学）は平安時代に入唐した弘法大師空海に始まるが、その後の留学僧によって、梵字で書かれた多くの経典・儀軌類が中国から将来された。平安時代から連綿として継承されていた梵学であったが、梵学の研鑽は江戸時代中期から後期に最高潮を迎える。その時代的な背景は国学、洋学、文献学の発展が間接的に考えられる。我が国における学問の高揚が、慈雲およびそれに続く人たちの梵学に何らかの影響を与えたと思われる。慈雲尊者の梵学は、それまで行われていた経典・儀軌の梵字を単に写す営みから、梵語文法を学んで経典・儀軌の梵語原典を解読して解釈を行う水準に達した。慈雲は、国内に散在していた梵文資料を収集し、それらの異本対照や辞書の編纂に従事した。その集大成が『梵学津梁』一千巻として編纂されたのである。『梵学津梁』は膨大な資料であり、そこに収められた経典の一部についての研究は行われているが、『梵学津梁』の全体像はこれまで不明のままであった。『梵学津梁』は全体で一千巻よりなると伝えられるが、それさえもはっきりとは確認されていないのが現状である。本論文は、高貴寺における現地調査に加えて、近年慈雲尊者二百年忌を記念して作成された「高貴寺DVD」を使用して『梵学津梁』の分析を行っているが、特に『梵学津梁』所収の大乘経典類を中心に解読研究を行い、さらにこれまで殆ど知られていなかった『梵学津梁』の全体像とその編纂過程についても明らかにしている。まず、本論文を構成する各章の概略を示せば以下の通りである。

第1章《梵学津梁についての導入部》 『梵学津梁』が編纂された背景を明らかにするために、高貴寺、慈雲、慈雲の弟子について述べ、『梵学津梁』の概略を紹介する。さらに、近年高貴寺で作成された『梵学津梁』のDVD（高貴寺DVD）の内容構成についても紹介する。

第2章《目録より見た梵学津梁について》 複数残されている『梵学津梁』の目録類に対する調査を行う。本章の前半部では、高貴寺に伝えられる目録とは異なる『梵学津梁』関連の目録について分析を行う。後半部では、高貴寺に残る目録類を分析して、それらの類似性や相違を検証する。これによって、現存する『梵学津梁』に収められた経典番号と一部が合致する目録（草稿本）が高貴寺に存在することが判明した。これによって、慈雲の目指した『梵学津梁』編纂についての概略が明らかになった。さらに、焦点となる『梵学津梁』一千巻が完結したかどうかについても検証する。結論としては、目録類の検証により、ほぼ完成の域には達していたが、慈雲の存命中は一千巻全体の完成には至らず、未完のまま終わったことが確認された。つまり『梵学津梁』は当初構想された一千巻には至らなかった未完本である。

第3章《梵学津梁の現状について》 高貴寺DVDに収められている経典類を検証して、慈雲が残した『梵学津梁』について考察する。第2章で扱った3種類の目録と、高貴寺DVDを比較して、慈雲が収集した経典類についての調査と研究を行う。『梵学津梁』は7部門（本詮、末詮、通詮、別詮、略詮、広詮、雑詮）から構成される。第2章における分析の成果として作成された比較一覧表に基づいて、7部門の経典にあたり、各部の特徴を考察する。一例として、貝葉写本については、目録上では数種類が記載されているが、高貴寺DVDでは貝葉自体でなく、その写しが1点収められているのみである。梵語の文法書類については『七九鈔』の重要性が認識されて、多く所載されていることが判明した。梵文の比較対照法として『梵学津梁』では「諸譯互證」という方法が見られる。「諸譯互證」は経典の梵文と漢訳、さらに単語訳を一覧に対照にする方法であるが、当時としては画期的な方法であることも明らかになった。反面、梵学とは直接の関係のない、ヨーロッパを含む海外事情を述べる『泰西圖説』（全7巻）も収められていた。これにより、慈雲尊者はヨーロッパ系外国語の存在も認識し、梵語をそれらと同列に置いていたことが窺われる。

第4章《梵学津梁所蔵の「弘法大師請来四十二部」について》 『梵学津梁』は本詮第1巻から「弘法大師請来四十二部」にもとづいて経典・儀軌類が配されている。『梵学津梁』編纂の目的が「弘法大師請来四十二部」を構成する文献類の収集であったことが見て取れる。現存する『梵学津梁』のその箇所では慈雲の弟子であった尼僧の義文が丁寧に写したあとが見られる。本章は義文尼が写した「弘法大師請来四十二部」の奥書を中心に分析する。その結果、多くの場所、多くの人を経由してそれらが高貴寺に集められたことが判明した。なお、集められた諸資料の原本類は高野山の金剛三昧院所蔵本や東寺所蔵本などに確認できた。さらに『梵学津梁』に収める際の校訂に使用された梵文写本のあった寺院や校訂を行った人物についても考察している。

第5章《梵学津梁の梵文阿弥陀經について》 梵文『阿弥陀經』の調査と検証、さらに解読を行う。慈雲は収集した『阿弥陀經』の写本3種類によって校訂を行ったことが判明した。本章では『梵学津梁』所蔵の梵文『阿弥陀經』の概略を提示し、その梵文テキストの特徴も検証する。それによって、慈雲がどのように梵文写本からテキストを校訂したかが明らかになった。また、慈雲が校訂に使用した法宣の写本について、今まで不明であった法宣という僧侶の背景も明らかになった。さらに、慈雲の弟子の法護、諦濡によって『梵文阿弥陀經義釋』が木版で刊行されたが、そのテキストの校訂に当たって、宗派を超えて浄土宗の典壽が参加していたことも判明した。

第6章《梵学津梁の梵文普賢行願讃について》 梵文『普賢行願讃』の調査と検証、さらに解読を行う。梵文『普賢行願讃』について、空海の将来した梵本のみが現存し、その梵本は4系統に分かれて伝承されたと慈雲は考えている。慈雲はその4系統の写本を入手して校訂本を作成した。本章における分析によって、慈雲が校訂に使用した写本が他所にも存在していることも明らかになった。原本の同じ写本が異なる経路で慈雲および岡山の寂巖に渡っていることも判明した。さらに『梵学津梁』所蔵の梵文『普賢行願讃』の4種類の写本を対照して、梵語の特徴も検証し、『梵学津梁』における慈雲の梵文校訂方法も明らかになった。4種類の写本のひとつは真宗僧侶の海輪の所持本であった。海輪という僧侶を調査した結果、華嚴宗の鳳潭との関係も明らかとなった。

第7章《梵学津梁の梵文金剛般若經について》 梵文『金剛般若經』の調査と検証、さらに解読を行う。『梵学津梁』に収められた梵文『金剛般若經』については、先行研究は全く存在しない。梵文『金剛般若經』は慈雲の亡くなった後に収集、校訂された。奥書から見ると、複雑な経路で『梵学津梁』に収蔵されたことが分かる。まず、梵文写本を搜索した真阿弥陀仏という人物の特定を行い、天台真盛宗の真阿上人宗淵のことであることが判明した。梵文写本は宗淵が探し出し、融通念仏宗の詮海に渡った。詮海による複写が高貴寺に送られた。高貴寺で校訂本が作成され、梵文と漢訳二本を並べて対照した版を作成して『梵学津梁』に入れられた。明治時代に入って、イギリスの外交官アーネスト・サトウや真宗僧侶の金松空賢の手を経て複写が英国に送られて、マックス・ミュラーによる梵文校訂テキストの底本となった。慈雲の死後に得られた梵文『金剛般若經』の存在意義は大きい。

《まとめ》 本研究によって『梵学津梁』は慈雲尊者一人ではなく、多くの人の手を経て編纂されたものであることが判明した。宗派も、真言宗を超えて、天台宗、天台真盛宗、融通念仏宗、浄土宗、真宗の僧侶が関与していた。また、慈雲やその弟子たちは、写本を収集するだけではなく、辞書の編纂、文法書の編纂、写本の校訂、漢訳との対照など、梵語を読解するための作業を行った。彼等の梵語に対する知識は、非常に高度な水準に達していたと言える。また、海外にも目を向け、梵語を外国語の一言語として位置づけていた。『梵学津梁』は、明治時代に入っても梵語学を志す人に大きな影響を与えた。本論文により今まで知られていなかった『梵学津梁』の全体像を明らかにできた。併せて、今まではほとんど研究されていなかった『梵学津梁』所収の梵文『金剛般若經』等の梵文經典類の解読と分析を行うことができた。

〔２〕審査結果の要旨

慈雲尊者の『梵学津梁』の名前を知らない仏教研究者はいない。江戸時代に全国に散在する梵字・梵文資料を収集して梵語を極めた僧侶がいたということと、特に一千巻といわれる巻数とも相俟って、それは伝説化した文献となっていたと言ってよいかもしれない。しかしその実体ともなると、一部が木版で刊行されただけで、現物は大阪の高貴寺に秘蔵され、本当に一千巻もの書物が存在するのかといった根本的な疑問も含めて、その内容は今までほとんど明らかになっていなかった。奥風栄弘氏の学位請求論文は、その『梵学津梁』についての総合的な研究であり、これまでの研究を一步進めたことは研究成果として大いに評価できる。特に目録類の調査から、慈雲が作成した草稿本には借用の許された副本があったこと、そして高貴寺以外に所蔵される『梵学津梁』の目録は、この副本が転写されて伝播していったことが明らかにされ、さらに、慈雲が資料収集する上での指針とされた目録も同定されている。その上で、『梵学津梁』が当初構想された一千巻としては完成するには至らなかったことをほぼ明らかにしている。

さらに、この論文の成果のひとつは、近代仏教学あるいは仏教文献学の端緒ともなったマックス・ミュラーの『金剛般若経』や『阿弥陀経』の梵語校訂テキスト刊行の業績へと至る『梵学津梁』所収の梵語典籍の素材に関する研究である。英オックスフォード大学へと送られた諸資料が引く系統の詳細が今回の研究で初めて明らかになった。本論文で、奥風氏は、マックス・ミュラーに送られた複写の元になった『梵学津梁』所収の『金剛般若経』や『阿弥陀経』の写本を解説して、その一部を論文中に紹介しているが、その成果を見ると、紀元8世紀より前にインドで書写された梵文写本が中国に伝えられ、それが平安時代の我が国の留学僧らによって中国から将来され、書き継がれていった過程において、インドの原典が江戸期に至るまで比較的正しく保存・伝承されていたことが見て取れる。

また、『梵学津梁』の編纂が、わが国における同時代の学問の高揚と進取的な気運に連動していることを指摘した点が興味深く、今後はこうした視点からの見直しも進めていく必要性を感じた。なお、慈雲の梵語への関心については、正法律を興して釈迦牟尼の原点に帰ろうとした精神や、義浄の『南海寄帰伝』や玄奘の『大唐西域記』に強い興味を示していたことや、『十善法語』などで示した戒律への真摯な思いを考え合わせると、奥風氏が考えるように、国学や洋学などの発展と高揚という時代背景が間接的に影響し、慈雲尊者の『梵学津梁』編纂への熱意を誘ったと看做すことも可能ではあるが、本質的には慈雲のインドへの憧れは教主釈迦牟尼世尊への強い思慕が土台としてあり、これは入唐僧たちの時代から、明恵や栄西の時代を経て、脈々と一部の仏教者に引き継がれてきた思いでもあろう。

さらに、この論文で丹念に調べられているのが、慈雲尊者を支え、その事業を推進した周囲の人士の素性である。過去帳や位牌の確認という作業を通して『阿弥陀経』の梵文写本に関係した覚城阿闍梨や法宣阿闍梨などの年代が確定した。これらの作業は本論文の確実な成果である。さらに、「弘法大師請来四十二部」『阿弥陀経』『普賢行願讃』『金剛般若経』の収集作業については、慈雲の弟子たちだけでなく、宗派を超えた多くの人々が関わったことが浮き彫りにされ、『梵学津梁』の編纂および伝承がさまざまな人間関係の

ネットワークを築いていたことが明らかにされた点も重要な指摘である。

このように本論文の功績は多くあるが、体裁や論述方法において問題となる点も認められる。引用論文の当該箇所を註記で引く場合に著者名、論文名等を繰り返し記しているが、参考文献表に参考論文表を付加して効率良く示したほうが良い。辞書類からの単純な援引を本文として示すことも本文の疎密を作ってしまうので思わしくない。誤字・脱字、あるいは文章における主語と述語の関係で違和感のある箇所が散在しているので、それらの訂正が必要である。地の文において、旧字、略字等の混在が見られるが、統一した方がよい。また、慈雲尊者の伝記は岡村圭真氏の研究に拠っているようであるが—岡村説の訂正は見られるが—その点がはっきりと明記されていない。なお、慈雲の生涯については、『密教大辞典』の中でも詳しく説明されているし、その他の研究もあるが、なぜ岡村氏の研究を主として参照したのかが不明瞭である。さらに、付録として巻末に示された目録の比較表は便利ではあるが、小さくて読みづらいので、もっと大きくした方がよい。目録の比較から言える点についても本文中でさらに詳細に分析して欲しかった。

このように細部には種々問題点も認められるが、論文自体の価値を損なうものではない。本論文は、実体のほとんど知られていなかった『梵学津梁』の全体像と編纂過程を初めて明らかにし、さらに、その中から『阿弥陀経』『普賢行願讃』『金剛般若経』の梵文写本を解読して、その資料的価値を認める分析を行ったことは大いに評価できる。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。